25　埼玉　首都圏　14版　2019年（令和元年）6月22日（土）　朝日新聞

足技キラリ 気持ちはメジャー

川口 ストリートサッカー国内トップの2学生

狭い場所でも室内でもできる「ストリートサッカー」。あまり知られていないこの競技の国内トップを競う大学生が川口市にいる。小黒拓人選手（19）と永井佑京選手（20）の2人だ。小学生のころから競い合ってきた2人は、8月にデンマークで開かれる世界大会で優勝してメジャーにしようと足技を研ぎ澄ましている。

ストリートサッカーと聞くと、南米の空き地で子供たちが走り回ってやるサッカーというイメージだが、発祥は欧州。広場などで1対1、3対3などで競う都会のスポーツだ。

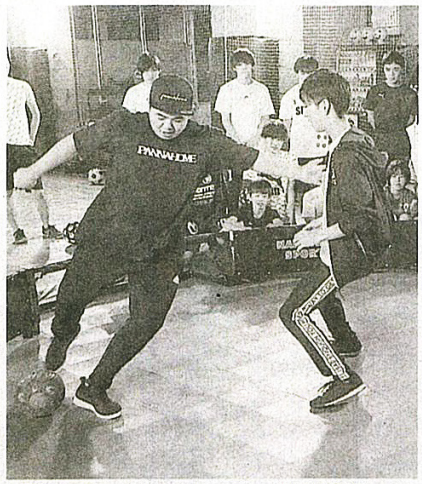
日本ストリートサッカー協会が推奨するのは、幅約1メートル、高さ約50センチの8枚のフェンスで囲った対角線が5メートルほどの八角形の中での1対1。1試合3分でゴール数を争うが、「PANNA」と呼ばれるボールの股抜きを成功させると、点差に関係なく勝ちとなる。強い体の接触は禁止されており、ボールもサッカーより一回り小さなデニム製で足になじみやすく、幅広い人が楽しめる。

しかし、競技となると別だ。試合時間は短いが、常に相手と対面するため休む時がない。球を回しながら広いピッチを使うサッカーとは異質な、目も頭もフル回転させる短距離走という感じだ。

国内でこの競技を牽引するのが小黒選手と永井選手だ。2人は子どものころ、同じサッカーチームにいた。小学3年の時、オランダから来たストリートの選手に永井選手が挑戦した。「衝撃でした。たった2秒でやられたんですから」。そこからのめり込んだ。小黒選手も、この選手の華麗な足技に魅せられた。

マイナー競技で子どもだった2人が努力を継続するのは難しかったが、小黒選手は「隣にレベルの高いライバルがいたから頑張れた。この関係、もう11年になるんですよね」と話す。2人は所属するクラブチーム「PANNA HOME」（東京）で切磋琢磨して、そろって出場した昨年の世界大会では小黒選手がベスト8に勝ち上がった。

ストリートサッカーを楽しむ人は増えているが、全国大会に出場するのはまだ120人余り。2人は「対人の技術は、相手との距離が近い分だけサッカーよりも難しい。だから、自分たちが活躍してメジャーになって、ストリート出身のサッカー選手が生まれるような時代をつくりたい」と力を込めた。（堤恭太）



ストリートサッカーでバトルを繰り広げる小黒拓人選手（左）と永井佑京選手＝東京都新宿区東榎町

「対角線5メートル」中でプレー 世界大会V狙う

※無断転載、複製はご遠慮ください